

筑波大学の総合智教育と教養教育

本学は、高度に専門的な知識「専門智」と、それを活かす多様で学際的な知識の修得で得られる総合的な知的基盤に加え、倫理観や人間性、論理性、国際性、コミュニケーション力、豊かな心身基盤、マネジメント・企画調整力などの「汎用智」がバランスよく培われた高度な知的人材を育て上げるための教育体系を「総合智教育」と定めています。この体系による教育により、国際化や科学技術の進展など激しい変化に対応できる統合された智の基盤を涵養します。各自が専攻する専門分野にとらわれることなく、共通に求められる知識、思考法等の知的技法、人間としてのあり方や生き方に関する深い洞察、及び現実を正しく理解する力の獲得はまた、各自の専門分野を掘り下げる原動力となるはずで

です。本学では、様々な学問分野への造詣や社会汎用的な問題を学問分野に還元してゆく視座を総合科目により醸成するとともに、自らの専門以外の専門科目の履修を促すしくみを全学的に組み込みます。これを本学におけるリベラルアーツの学びとしてとらえ、さらに、全学共通的に学ぶ外国語や情報、体育、国語、芸術を含めて本学の教養教育と位置付けます。各学類・専門学群で開設される専門基礎科目や専門科目の学びがその専門性への垂直的展開とすれば、本学におけるリベラルアーツの学びは教養教育の水平的展開といえます。この両者を車の両輪とするカリキュラムを全学的に構築しています。

学生一人ひとりの関心と必要に応じた、様々な学類・専門学群の開設科目の履修を含む学生自身による自由な履修設計を通して、専門性を深める教育と教養を育む教育により得られた知識が学生自身の内に融合され、総合智として広い学問的視野に基づく高度な問題解決能力を備えることができます。



教育の質を保証する仕組み

本学の総合智教育を推進し、その質を高めていくために、全学的組織として総合智教育推進委員会を設置しています。共通性の高い汎用智の醸成にかかわる学群共通科目や総合科目の企画・編成・継続的改善を行い、専門智の涵養をになう各学群・学類との有機的連携を強化しながら、バランスのとれた総合智の醸成を展開します。

教養教育の中の共通科目の位置付け

筑波大学における共通科目は、専門分野に関する知識の修得において基礎的な技能となる表現能力、構成能力、およびコミュニケーション能力の養成を通して、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを目的としています。とくに学問上の枠組みにとらわれない普遍的な内容の構成に配慮しながら、大学生として相応しい学術的・学際的な素養が身につくような科目体系を構築しています。

総合科目

Multidisciplinary Subjects

教育目標

初年次から高年次まで、大学という新しい学修環境に
適応し、協働しながら自律的にキャリアを形成すること
を目指します。さらに、自然と人間、多様な社会と文化
に関わる幅広い学問分野に触れて、既存の枠組みを超
えたこれからの社会に必要な知の基盤を学び、人間とし
ての真のあり方や生き方に対する深い洞察力、世界を
正しく捉える能力の獲得を目指します。

教育内容

初年次生が、大学という新しい学修環境に適応し、自
律的にキャリア形成を始めることを支援する少人数編
成科目、さらに高年次にわたって、学問のあり方や自身
との関わりについて、幅広く多様な視点から考えること
により、専門分野へ進むための確かな知的基盤を整える
多様な科目があります。

ファーストイヤーセミナー

20名前後の新生と担任教員1名で構成するクラスを
単位として、春ABモジュールに開講する科目です。履
修計画やキャリア形成、メンタルヘルスなど学修面・生
活面の両面から大学生活に適応できるよう支援すると
ともに、学生と教員及び学生間のコミュニケーションを
図ります。

学問への誘い^{いざな}

大学における学問分野の成り立ちや広がり、他の学問
との関係性について具体的な問題から解き明かす科目
です。自ら専攻しようとする専門分野の意義や、それら
専門分野の学群・学類での位置付けについても理解を
深めます。

学士基盤科目

大学での自身の学びを、俯瞰的に捉えて動機づけられ

るように、広く社会や世界の視座からの多様な考え方・
生き方に触れる科目群です。この科目を履修することで、
自らの学問的基盤を整えます。この科目群には、学問に
対する多様な考え方ができるように、キャリア支援的な
内容、分野横断的な内容、自己分析や自己の確立を促
す内容、社会生活への適応性を涵養する内容を含みま
す。

教育方法の特徴

■ファーストイヤーセミナーでは、少人数クラスに分かれ、
担任教員を中心として初年次学生向けのガイダンス及
びケアを手厚く行っています。

■学問への誘い^{いざな}では、大学の学問の広さ深さが実感で
きて、学生が自分の専門分野の選択やこれからの履修
計画に参考になるように、本学独自に編集したガイド
ブックを使用します。

■学士基盤科目では、世界の第一線で活躍中の学内外
の研究者・著名人によるリレー講義科目、OB・OGを
招いて社会体験を踏まえじっくり語り合う科目、本学の
伝統に密着した科目など、多様なスタイルの科目群から
選択して履修することができます。

■manabaやティーチング・アシスタントを活用するなど
多様な授業方法を実践し、全学を先導する教育を行っ
ています。

達成すべき水準

協働性・主体性・自律性

ファーストイヤーセミナーを通じて学生と教員、学生間のコミュニケーションを図り、チームワークとリーダーシップの重要性を理解します。

広い視野と国際性

学問への誘い^{いざな}・学士基盤科目では、自然と人間、社会と文化にかかわる幅広い知識・考え方に触れることにより、自分が専攻する分野の相対的な位置づけを認識し、俯瞰的な視野と学際的なものの見方、国際性及び社会適応性を身につけます。

教育の質の保証

履修指導の充実

本学の教養教育の理念・目標を理解した上で履修できるように、履修指導を行います。具体的には、入学式後に開催される学類・学群ごとのオリエンテーションの中で総合科目について丁寧な履修ガイダンスを実施します。

「総合科目」専門部会

総合科目のあり方、科目の内容や成績評価のガイドラインについて検証します。

FDの実施

筑波大学FD委員会の一環として、授業評価アンケートを実施し、その結果を各担当教員へフィードバックすることで、自己点検を実施するとともに総合科目の改善等を図ります。

総合科目 合計3単位以上必修

ファーストイヤーセミナー

1単位必修

学問への誘い^{いざな}

1単位必修

学士基盤科目

1単位以上必修

体育

Physical Education

教育目標

本学の体育(筑波体育)は、最新のスポーツ科学を基にした多様なスポーツ実践を通して、生涯スポーツに向けたスポーツ技術の修得、健康・体力を維持増進するための知識と実践力、社会人としてのフェアな考え、他者理解とコミュニケーションについて学ぶことにより、『健やかな身体・豊かな心・逞しい精神』の育成を目指します。修得される汎用コンピテンスとして、「心身の健康と人間性・倫理性」、また、「協働性・主体性・自律性」が挙げられます。

教育内容

カリキュラムは、基礎体育(1年)、応用体育(2年)、発展体育(3年)と学年に応じて学修目標を設定しています。授業は、実技を中心としていますが、健康、体力、スポーツの意義などについて講義も実施しています。

実技

実技は、個人スポーツ、球技スポーツ、武道、アウトドアスポーツ、ダンスなど多彩な科目を開設しています。また、

健康・体力づくりに関する実技として、フィットネストレーニング、リフレッシュ体操やジョグ&ウォークなどを開設しています。

講義

生涯にわたってスポーツを楽しむという観点から、健康・体力づくりに関する問題やスポーツの意義、及びスポーツを楽しむためのスポーツ技能の修得法などについて学びます。

教育方法の特徴

本格的なスポーツ施設での授業

公式大会の開催が可能な陸上グラウンド、人工芝のサッカー場やテニスコート、学内を囲むように整備されたジョギングコースなどの17の屋外施設と中央体育館、温水プールなどの25の屋内施設を用いています。

多彩な授業科目

テニス、バレーボール、バスケットボール、サッカーなどのポピュラーなスポーツはもちろんのこと、トランポリンな

筑波体育

発展的なカリキュラム

発展

3・4年

スポーツライフ
通年/集中実技による
幅広いスポーツの経験

応用

2年

スポーツカルチャー
通年実技による運動の定着化/スポーツの理解

基礎

1年

スポーツリテラシー
春と秋で科目を変え、偏りのない総合的な基礎学習

学年に応じた学習目標

どを行う器械運動、気功や呼吸法を学ぶボディ・ワーク、つくばマラソンで完走を目指すジョグ&ウォーク、けがなどを抱えた学生に対応したトリム運動、護身術としても活用できる柔道や空手など、科目数は30数種目に及びます。

豊富なシーズンスポーツ科目の展開

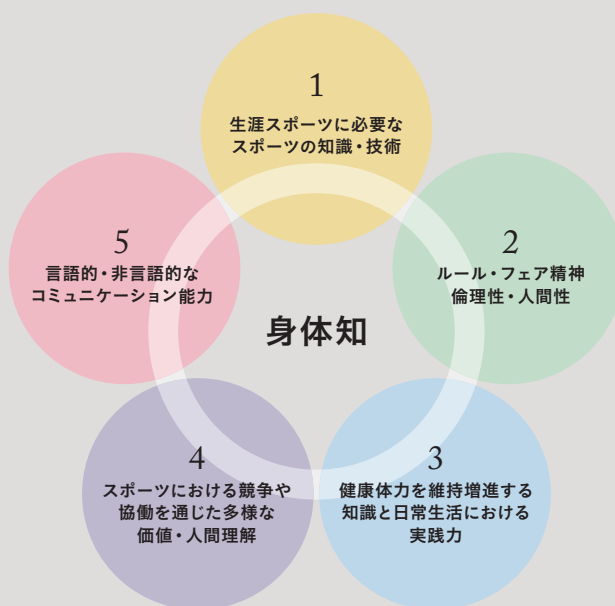
スノーボード、スキー、スケート、ヨット、ウインドサーフィン、スキダイビングなど、季節に応じた集中科目を開講しています。

スペシャリストによる授業

授業は科目に精通した専門家が担当しています。オリンピックや世界選手権などでメダルを獲得したスペシャリストをはじめ、それぞれのスポーツでトップクラスの専門家が授業を行います。

達成すべき水準

筑波体育で修得する5つの身体知



教育の質の保証

■ 学生による授業評価を体育科目独自に行っています。評価の高かった教員の授業について教員相互の研修を実施しています。

■ 学外の第三者による定期的な評価を受け、それに対する改善策を講じています。

■ 安全配慮が必要な授業や補助を必要とする授業では、教員とティーチング・アシスタントが一体となって授業を実施しています。

■ 体育センターWebサイトでシラバスを公開し、学生がいつでも授業に関する情報を入手できるようにしています。

■ 大学体育のカリキュラムについて、国内外の調査などを行い、新たな視点からカリキュラムモデルに関する研究を積み重ねています。

外国語

Foreign Languages

教育目標

研究型大学である本学の理念に照らし、まず第1に、学術研究の活動で外国語を駆使できるようになることを目指します。2点目として、複数の外国語を学ぶことで、文化・社会・価値観の多様性を知り、複眼的な視点からの思考力を育てます。3点目として、外国語運用能力を総合的に伸ばすことで、実社会での活動に役立つコミュニケーション能力と異文化対応力の向上を図ります。

教育内容

第1外国語、第2外国語として「英語」、「初修外国語」（ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語）を学びます。また英語プログラム等で学ぶ留学生や帰国生のために「日本語」を開設しています。

英語

学術研究の活動で英語を駆使できるよう、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」学ぶことを念頭に置いた教育が行われます。

■ 必修科目

学群・学類の専門英語への橋渡しとなる「一般学術目的の英語 English for General Academic Purposes」として English Reading Skills と English Presentation Skills を学びます。前者では学術的な著作を精読し、学術英語の基本語彙や表現を学び、後者では学術的な発信活動に必要な英語運用能力の基礎を学びます。

■ 選択・自由科目

学生の多様なニーズにあわせて、発信能力の向上を目的とする科目(English Academic Writing, English Academic Presentation 等)や留学等に関連する科目が設けられています。

初修外国語

未知の外国語学習を通じて世界の文化と社会の多様性を学びながら、複眼的思考力・異文化理解力の育成と当該外国語の運用能力の伸長に資する教育が行われます。

■ 必修科目

「基礎〇〇語」では、当該初修外国語の基礎的な文法や表現を学び、「〇〇語圏の言語と文化」では、当該言語のしくみや特性のみならず、その社会的・文化的な側面についても学びます。

■ 選択・自由科目

中上級レベルを目指す学生のための初修外国語科目（「応用〇〇語講読」、「応用〇〇語作文」等）が開設されています。

日本語

留学生や帰国生に対して習熟度別に日本語科目を開設しています。留学生の多様な学修ニーズに合った、外国語としての日本語教育が行われます。

■ 入門・初級科目

日本で生活するための日本語を学びます。

■ 中・上級科目

読む・書く・聞く・話すの4技能ごとに、学習目的に応じて履修ができます。

■ キャリア支援科目

学生が自身の進路を主体的に選択できるように支援するための日本語力を学びます。

教育方法の特徴

■ オンライン教材やeラーニング教材を活用した授業を積極的に展開しています。

■ アカデミックライティングサポートデスク (Academic Writing Support Desk) を設置し、英語のアカデミックライティングスキルの向上を支援しています。

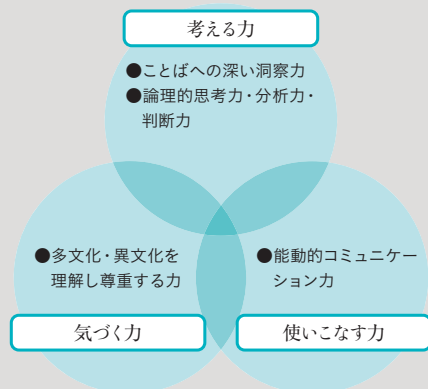
■ 英語と初修外国語では、海外の提携大学等において3～4週間程度の海外語学研修を実施し、現地での言語文化体験型の外国語教育にも力を入れています。

■ 留学や外国語検定試験の受験、外国語によるボランティア活動等に対して「優れた外国語活動」認定書を発行し、授業外の学生の自主的な外国語の学習や活動を支援しています。

■ 達成すべき水準 ■

英語

一般学術目的の英語を基盤として修得する3つの力



初修外国語

■ 必修科目の履修を通じて培う能力・資質

・基礎的な文法知識、発音や会話能力等の初歩的な言語運用能力

■ 2年次生以降の科目履修を通じて培う能力・資質

・4技能(読む・書く・聞く・話す)の基礎的な運用能力

・複眼的思考力、異文化理解力、言語や文化の多様性を尊重する態度

・学術研究の活動で当該初修外国語を活用する能力

日本語

■ 科目履修を通じて培う能力・資質

・日本語で専門的に研究するための日本語運用能力

・日常生活に必要な日本語運用能力

・日本での就職に要する日本語運用能力等

■ 教育の質の保証 ■

■ シラバスを公開し、授業内容と成績評価の基準を明示しています。

■ 学生による授業評価アンケートを実施し、その結果を教員にフィードバックし、授業の改善に役立てています。

■ 外国語教育FD研修会を毎年実施し、教育の質の向上に向けた取り組みを行っています。

■ 英語では、学群1年次と3年次にTOEIC IPテストを実施し、経年的に学生の英語力を把握するとともに、その分析結果をカリキュラム開発等に利用しています。

情報

Information Literacy

教育目標

情報社会に生きる社会人として必要な、コンピュータとインターネットに関する基礎知識と社会における位置づけを理解するとともに、情報社会を支えるデータの活用に関する基本的な考え方を修得するための以下の4項目を目標とします。

■ 情報社会において必要とされる倫理感を身につけ、インターネットサービスの利用に不可欠な情報リテラシーを修得すること

■ コンピュータやインターネットを用いた自分の行動に責任をもてる能力を養成すること

■ コンピュータ、アプリケーションソフト、インターネットサービスを使う状況になっても独力で使いこなせる能力を身につけること

■ データを適切に収集および管理し、収集したデータを、データ分析に役立てる能力を修得すること

教育内容

「情報」の授業は「情報リテラシー」講義・演習と「データサイエンス」の三科目から構成されます。

講義はコンピュータによる情報処理やインターネットの基本概念を、演習はコンピュータを利用した基礎的な情報利用・共有・発信技術の修得を通じて上記の教育目標を達成します。

「データサイエンス」では、講義による統計学・データ工学の基礎の修得と演習によるデータサイエンスの実践の反復を通じて上記の教育目標を達成します。

教育方法の特徴

■ 情報リテラシー（講義）および情報リテラシー（演習）は以下の項目を標準学修項目としています。各学群・学類のニーズに合わせて、以下の標準学修項目を基準に具体的な学修内容を調整しています。講義は情報の基礎概念を中心とした know-why を、演習は情報の利用・共有・発信技術を中心とした know-how を学びます。

情報リテラシーの標準学修項目

情報リテラシー（講義）

情報倫理・情報セキュリティ

情報表現

計算基礎

コンピュータの仕組み

インターネットの仕組み

情報リテラシー（演習）

文書作成

情報発信・情報共有

プレゼンテーション

■ データサイエンス（演習）は以下の項目を標準学修項目としています。各学群・学類のニーズに合わせて、以下の標準学修項目を基準に具体的な学修内容を調整しています。

データサイエンスの標準学修項目

データサイエンス

データの収集と管理 1: データの種類とデータの収集

データの収集と管理 2: データの前処理と整理

データの収集と管理 3: データ表の設計と管理

高度なデータの収集と管理: ビッグデータ

データの可視化

データの分析 1: 質的変数の理解

データの分析 2: 量的変数の理解

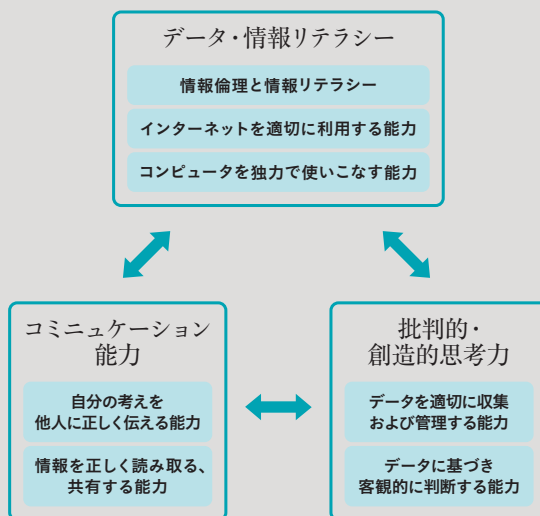
データの分析 3: 様々なデータの分析

高度なデータの分析: 人工知能

情報理工学位プログラム等の大学院生がティーチング・アシスタントとして授業に加わり、教員の指導の補助をきめ細やかにを行います。

達成すべき水準

「情報リテラシー」および「データサイエンス」を通じて、「データ・情報リテラシー」、「批判的・創造的思考力」および「コミュニケーション能力」の三つの汎用コンピテンスに関わる基礎能力を修得します。



教育の質の保証

情報リテラシーとデータサイエンスの標準学修項目を基本として、各学類・学群のニーズに合わせて授業内容と進度を調整します。

授業アンケートを実施し、その結果を各教員にフィードバックし授業改善を行います。

教員懇談会を実施し、授業における問題点、課題を討議・共有することで授業改善を行います。

「情報」専門部会(各学群選出の代表教員から構成)において、授業改善について議論し、これを実際の授業にフィードバックします。

国語

Japanese

教育目標

国際化社会及び知識基盤社会を生きぬいていくためには、母語である日本語についての正しい知識を修得し、適切に用いて他者との意思の疎通を円滑にはかれる能力や、多様な情報を基に自己の考えを明確に表現し伝達する能力が必要です。共通科目「国語」では、大学での学修や社会人として活躍するために必須となる、このような日本語運用能力を修得することを目標としています。

教育内容

基礎的な内容から発展的な課題に対応した「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」を設けています。

授業は、40人程度を1クラスとし、きめ細かな指導を行う配慮をしています。

必修科目に指定する学群・学類では、その特色に配慮した授業を提供しています。(例) インフォームドコンセントにおけることば(医学・看護)・コーチとことば(体育)

必修科目に指定していない学群・学類では、自由科目とし、専門分野の異なる学生同士が学べる環境を用意しています。

国語Ⅰレポート(論文)作成の基礎

レポート作成の出発点として、問題意識・独創性・書き手の心得・客観的に論述する姿勢・表現に必要な基礎的知識を学び、実践的トレーニングを行います。

論文の発想、独創性、問題意識、主題の意義・価値などを理解する。

資料の調査・収集・整理・検討を通して、問題点を整理する。

推敲を行い、相互批評を通して、文章の善し悪しを学ぶ。

国語Ⅱ「国語Ⅰ」の応用・発展

「国語Ⅰ」を基に、自立的な書き手としての意識を高めます。

問題意識を明確にして、仮説を設定する。

目的に応じた文献の検索方法、情報整理の仕方を理解する。

先行研究を批判的に読み、主題との関連性を検討し、論拠を検証する。

対人関係を考慮した表現ができるよう、敬語・手紙文を学び、実践する。

教育方法の特徴

演習型の教育方法を取り入れています。

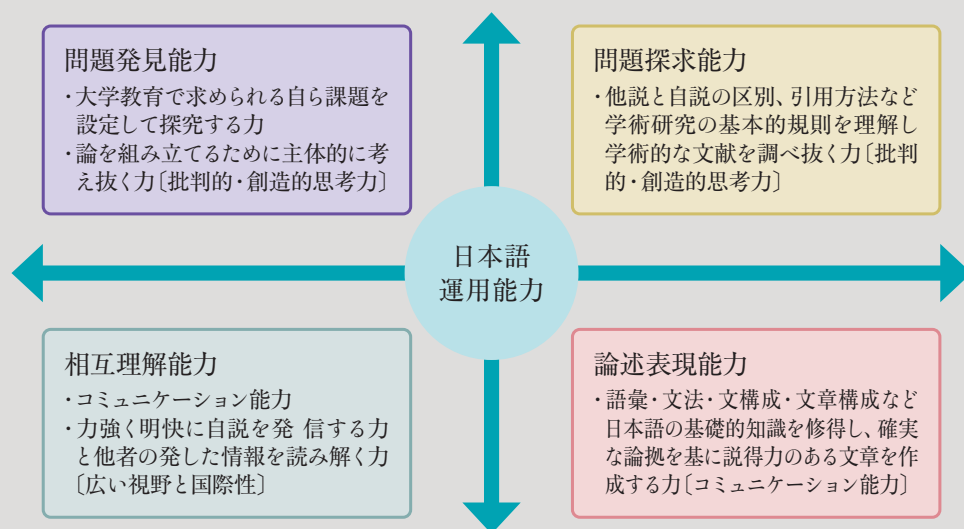
実際に文章を作成したり、スピーチしたり、学生同士が相互に批評し合いながら、日本語運用能力の向上を目指します。

教員の専門性を活かした教育を行っています。

日本語学・国語教育学など、日本語の専門家が授業を担当し、それぞれの専門性も活かした授業内容を工夫しています。

達成すべき水準

4つの能力達成



教育の質の保証

シラバスを公開し、各教員の専門性を活かした特色のある授業内容、成績評価の基準を明示しています。

TWINS*による授業評価や教員が独自にアンケート調査を行うなど、授業改善へ向けてのフィードバック体制を十分に整えています。

学群・学類の特色などを考慮し、実態に応じた授業内容となるよう、定期的に話し合いの場を設定、前向きに授業の質の向上を目指しています。

* TWINS (Tsukuba Web-based Information Network System) は、オンライン教育情報システムです。

芸術

Art and Design

教育目標

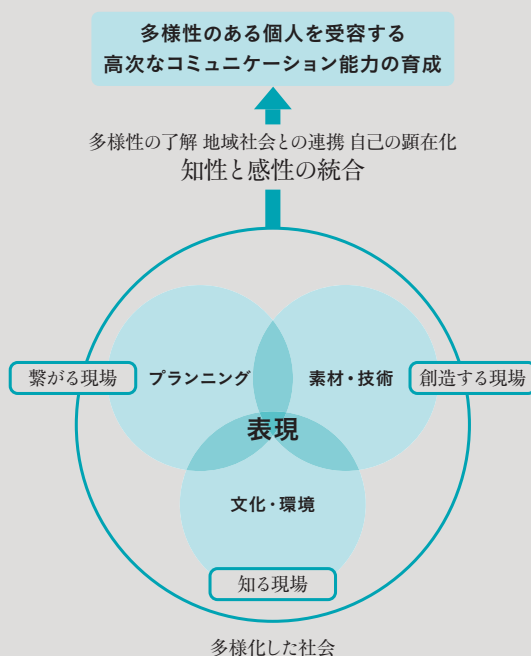
筑波大学は、芸術の専門家を育成する教育・研究組織を有する日本で唯一の国立大学法人の総合大学です。芸術専門学群が提供する教養教育は、この特色を活かして芸術に関する幅広い知識を学び、美的感性をみがき、表現する喜びを経験するだけでなく、グローバルな社会において多様性のある個人や価値観を受容し、自己の考えを発信することのできる高次なコミュニケーション力を育みます。知性と感性を統合して、自己を表現するとともに他者の考えを許容するバランス感覚の備わった人間力を育むことが共通科目「芸術」の教育目標です。

教育内容

教養教育としての芸術教育は、芸術表現に関する伝統や技術・素材を実践的に学ぶことで、異なる文化や社会的価値観の背景への理解を促します。

絵を描くことや美術館めぐりをするなど、芸術の制作や鑑賞の楽しさを自ら体験することが、人間が人間らしく生きる上でいかに大切なものであるかを理解し、その楽しさを生涯かけて探究する為の具体的方法や基礎知識を学びます。また、多様化した地域社会との関わりを模索し、あらゆる社会的基盤を整備する上での芸術の重要性を認識し、文化芸術振興のために行動する市民となることを目指します。

芸術の教育



教育方法の特徴

社会の一線で作家・研究者として活躍している教員が、芸術に関する「体験的知識」の授受や「作品創造」の為の技術や表現の指導、社会での「実地体験」をとおして、受講生が自らの個性や資質を深く考える契機となるよう指導します。

芸術専門の学生が学ぶ環境と同じ工房・実習室で学びます。芸術の専門を学ぶ学生と共に制作やプロジェクトを行うことで、共に学ぶことによる相互教育効果が活かされます。

制作系科目…創造する現場での表現する喜び

美術・デザインに関する素材、技法、表現について学びます。作品を実際に制作するために必要な素材・画材や道具の基本的名称や取り扱い方、モチーフ・描く対象の選択やテーマ・作品の主題の設定、作品制作の開始から完成までの流れ、制作の各段階に応じて必要となる技法の特徴、造形感覚の練磨、形態把握や色彩表現、制作の心構え等、制作に必要な基礎的知識と基本概念について学びます。

油彩画実習、日本画実習、塑造実習、書(A・B・C)

絵本制作、イラストレーション

問題解決型科目…繋がる現場としての社会での実地体験

地域社会での美術・デザインによる問題解決型授業を行います。アートとデザインによるプロジェクトを実際に組織し、社会に対してアートとデザインができることを学びます。

大学を開くアート・デザイン プロデュース演習(1・2・3)

達成すべき水準

芸術文化の理解と深化

芸術表現は、それが生み出される時代と社会的背景に大きく影響されます。作家を受容する地域、人を育み芸術が育まれる土壌としての文化を理解し、感覚による評価だけでは得られない表現の奥行きを理解します。

技術・素材との実践的経験

対象の観察や素材の理解から表現の可能性を自ら発見することに取り組みます。表現活動を通して自己の内面にある考えや思いを表出させ、作品を媒体としたコミュニケーションが実現できることを理解します。

意思を具体化する方法の獲得

問題解決型授業では、社会での実地体験において表現や試みを実現させるためのプランニングを実践することが芸術の活用につながることを理解します。

教育の質の保証

自身の達成感とともに客観的・相対的な自己評価の場を提供することによって教育の質を保証します。授業の具体的成果である作品等に対して自己評価するとともに、講評会等において担当者が具体的に批評し、個々の持つ課題を明確にして次の目標を設定するように促します。

科目ごとに授業アンケート等を実施して現状把握に努めながら、学生個々の試行のプロセスにも目を向け、その疑問に応える場を提供します。

芸術専門学群のカリキュラム委員会において、アンケート等を参考に授業改善について議論し、授業担当者にフィードバックします。